

■ 世界は依然として動いている

米国とイスラエルがイラン攻撃に踏み切った。最高指導者ハメネイ氏殺害という重大局面に至ったが、仮に目的が体制転換にあるならば、その道は平坦ではない。空爆のみで国家体制を転換させることは、歴史が示す通り極めて困難である。

世界はなお動き続けている。その現実を横目に、小生もまた一つの総決算に向き合っている。

1. 輝坊の放談 — 総決算へ

小生のライフワーク「先の大戦とは何だったのか。その敗因、教訓、そして提言」。令和の御代に入り執筆を開始した「大東亜戦争メモランダム」は三百六十話を超え、一応の結節点を迎えた。それらを俯瞰し、重要な論点を抽出し、再構成したものが VTUBE 動画シリーズ『輝坊の放談』である。

・約十分間構成 ・口述原稿 ・対応スライド ・全百話完成

さらに、その教訓的要素を体系化し、電子書籍『輝坊の放談（総括編）—先の大戦から見えてきた日本の弱点と教訓』として刊行した。

そして今、最終段階として WEB 公開拠点の設置に踏み切った。

これは単なる公開ではない。思想の体系化であり、記録の恒久化である。

2. AI との協働 — 苦闘と発見

今回の一連の作業は、小生単独では到底なし得なかった。AI の力を大いに借りた。

極言すれば、小生と AI の共同作業である。しかし、それは単なる効率化ではなかった。

思考様式そのものの変化であった。

■ 協働の実相

小生が問いを投げる。AI が形を与える。小生が修正する。AI が再構成する。

この往復運動が続く。

そこでは曖昧な問いは通用しない。意図が不明確であれば、結果もまた曖昧になる。

つまり、AI は思考の鏡である。

認識の一致は絶対条件である。方向が逸れたなら、早めに原点へ戻す勇気が要る。過度な評価に浮かれてはならない。重要事項は自ら保存する責任がある。

AI は責任を負わない。覚悟を持つのは人間である。

■ それでも AI を用いる理由

AI は答えを出す存在ではない。問いを磨く存在である。適切に用いれば、それは思考を増幅させる触媒となる。だが、使いこなせなければ、思考は逆に流される。

AI に使われるのではなく、AI を使う。その主体性こそが肝要である。

3. これからの十年

WEB 公開拠点の設置は終点ではない。むしろ出発点である。

- ・ HP 構造の抜本的改造
- ・ タグ索引・三層構造の強化
- ・ 内部回遊の最適化
- ・ 戦略記事のさらなる深化

まだ言い足りぬことがある気もする。それを掘り起こし、補い、磨き上げていく。

少なくとも十年。この課題と向き合う覚悟である。

■ 結びに

輝坊の放談は単なる動画ではない。電子書籍でもない。

それは、日本の自己省察の試みである。そして今回の過程は、人間と AI がいかに協働し得るかの実験でもあった。

時代は変わる。しかし、問い続ける姿勢だけは変わらない。それが、小生の覚悟である。